明治大学・ウィーン大学共同シンポジウムの歴史と展開

– 国際日本学と学際的コラボレーションを求めて –

井戸田　総一郎*　スザンネ・シェアマン**

明治大学とウィーン大学は 2005 年 9 月に全学的な協定に調印し、研究者ばかりでなく学生の往来も可能になった。ウィーン大学は現在 6 万 3000 人の学生と 7100 人の教職員を擁し、17 の学部と 130 以上の専攻を持つドイツ語圏最有力大学の一つである。今後さまざまな分野で交流が活発となり、それが明治大学の国際化に大きく貢献することを期待する。

ところで両大学の交流の始まりは 1999 年に遡る。この年の 11 月にシェアマンの紹介でウィーン大学教授セップ・リンハルト氏が明治大学で講演した。リンハルト氏は同大学人文学部日本学専攻の主任教授であり、この日の講演は日本の拳に関するもので、氏のまさに専門とする領域であった。講演の後、リンハルト教授と本学独文学専攻の教員によって相互の提携の可能性について話しあわれ、その関連で井戸田が 2000 年 3 月にウィーン大学の講演に招待された。井戸田はドイツ語で、天保期から明治初期における江戸・東京の劇場移転に関するテーマを話し、講演後、言葉の壁を越えながら東京とウィーンの文化を中心としたシンポジウムを毎年、開催地を交互に変えながら実施する可能性について熱い議論を交わすことになった。相互の理解と学問的知見を深めるには一回きりのシンポジウムでは不十分であること、さらにシンポジウムを継続的に長く続けて行くには、幅

*いとだ・そういちろう／明治大学文学部教授／ドイツ文学、比較文学
**スザンネ・シェアマン／明治大学法学部教授／映画学 (映画史、映画理論)

広い専門領域をカバーできる総合テーマの選択が重要であるという点で認識が一致した。リンハルト氏の提案によって、「東京とウィーン－日常と余暇」を総合テーマに、その都度、文学・演劇学・歴史学・社会学等の専門領域から参加者を集い、若手研究者も含めた学際的シンポジウムを開催することを決めた。

2001 年は明治大学創立 120 周年の記念の年であり、亡き後藤総一郎教授のご支援を頂き、同年 1 月に本学の記念事業の一環として第一回シンポジウムを華々しく開催することができた。山の上ホテルで行われた前夜祭には、理事長、総長、学長にそれぞれ挨拶をして頂き、さらに在日オーストリア大使も来賓としてご出席くださり、国際的雰囲気溢れる集いとなった。シンポジウムのテーマは「十九世紀における日常と遊びの世界－江戸・東京とウイーン－」であり、近代化のなかで伝統と革新の触れあう現象を多様な分野に渡って取り上げた。ウィーン大学の参加者の全員が日本語で講演したことはシンポジウムの成功に大いに貢献し、東京とウィーンをテーマに研究交流を深めていけるという確信を双方の参加者が持つことができた。シンポジウムに続いて、オーストリア大使館で明治大学とウィーン大学の交流の始まりを祝福するパーティも開催され、われわれの企画が学術を通した文化外交に寄与できることを改めて確認することになった。

1 年後の 2002 年 3 月に、開催地をウィーン大学に移して第 2 回目のシンポジウムが開催された。この間に、明治大学文学部とウィーン大学人文学部のあいだで研究交流の調印が交わされ、これは本学における学部間国際協定の最初の事例となった。第 2 回シンポジウムのテーマは “Wien und Tokyo um die Wende vom 19. zum 20. Jahrhundert”であり、19 世紀末から 20 世紀初めの世紀転換期を対象に文学・社会・演劇・映画から多様な現象を取り上げた。ウィーン大学からは日本学の研究者ばかりでなく、文芸評論家として著名なシュミット＝デングラー氏と演劇学のモーニカ・マイスター氏が参加した。明治大学からは神品芳夫氏、広沢絵里子氏、井戸田、シェアマンのドイツ文学者以外に日本文学の原道生氏も参加した。講演は、ウィーンを会場としているので、すべてドイツ語で行なわれ、原氏の講演は広沢氏によって通訳された。本学のドイツ文学関係者にとっては、日本の題材をドイツ語で話し、質問に応えるという刺激的な仕事を展

開できる場となった。シンポジウムについて、オーストリア学術会議のベルント・シャイト氏による評論が発表され、内容ばかりでなく、企画そのものにたいして高い評価が与えられた。シンポジウム終了後、在オーストリア日本大使館で会食が催され、日本文化の国際化に努めるわれわれの試みに外交面からの支持が表明された。また、このシンポジウムの成果は、ウィーン大学日本学研究所のシリーズ “Beiträge zur Japanologie”の第 37 巻として刊行されている。

2002 年 10 月から半年間、ウィーン大学日本学専攻のブリギッテ・シュテーガー女史が国際交流基金研究員として本学に滞在した。この機会に両大学の大学院生による共同研究発表会を開催することなり、2003 年 1 月に学部間の学術交流協定締結記念としてシュテーガー女史の講演会と合わせて、大学院学生国際研究発表会を開催した。日本滞在中のウィーン大学学生 3 名と本学文学研究科の 5 名が参加した。同年 7 月には、第 3 回シンポジウムが本学を会場に行なわれ、ウィーン大学からは日本学の常連リンハルト氏、スサンネ・フォルマネック氏、ローランド・ドメーニグ氏の他に、ゲルマニストのシュミット＝デングラー氏、演劇学のブリギッテ・マルシャル氏それに富山大学外国人講師 (ウィーン大学出身) のクラウディア・シュミットホーファ氏が参加した。本学からはドイツ文学の恒川隆男氏、井戸田の他に、小川武敏氏 (日本文学)、武田清氏 (演劇学) が加わり、さらに日本史とドイツ文学から大学院生 2 名が参加した。また法学から清野幾久子氏も加わり、学際性に色を添えることができた。シンポジウムの総合テーマは「1920 年代の日常とあそびの世界－東京とウィーン」であり、その成果は本学文学部の刊行物として公表されている。

さて、2005 年は EU と日本の相互理解を促進するために、双方の代表機関が “People to People between EU and Japan”という総合テーマの下にさまざまな企画を催す記念の年であった。ウィーン大学はこの企画のメジャー・プログラムの一つに本学とのシンポジウムを選び、しかも同大学の最初の催し物として 1 月 7 日と 8 日に第 4 回シンポジウムを組織することになった。このことは、これまでのシンポジウムの展開に同大学が高い評価を与えていることを示すと共に、文化外交面でも一定の評価を得たと言えるであろう。シンポジウム前日の 1 月 6 日には、在オーストリア日本

大使館でレセプションが開催され、シンポジウム当日も日本外務省からの祝辞を受けることになった。

総合テーマは “Alltag und Freizeit in Tokyo und Wien, 1930-1945”であり、戦争の時代における日常と余暇の問題を多様な視点から見ていこうとするものであった。ウィーン大学からはテーマとの関連で歴史学の分野からフランツ・エーダー氏とペーター・アイグナー氏が日本学の常連メンバー以外に参加した。演劇学からは今回ヒルデ・ハイダー＝プレーガー氏が講演した。明治大学からは恒川隆男氏、原道生氏、渡辺徳美氏、相原剣氏、さらに井戸田とシェアマンが参加した。今回の成果もウィーン大学のシリーズ “Beiträge für Japanologie”のなかの一冊としてまもなく刊行されることになる。井戸田がオーストリア・ラジオ放送局 (ORF) のインタビューを受け、講演の内容とシンポジウムの全体の企画についての情報を提供した。

2006 年 3 月 2 日と 3 日の両日に本学を会場に第 5 回目のシンポジウムが開催される。今回は戦後の占領期と 60 年代半ば位までを対象に扱うことになる。明治大学からは日本史の大学院生も参加し、若手研究者に開かれたシンポジウムとなる。

以上、本学とウィーン大学との共同シンポジウムのこれまでの展開の概略を紹介してきた。このシンポジウムの持つ多層的な意味をここで簡単に要約することは困難であるが、学術的な面に限るならば、日本学の国際発信と学際的コラボレーションの国際展開ということになるであろう。ウィーン大学の日本学研究者にとっては、研究成果を日本語で本格的に発表できる機会を組織的に持てることは大きな魅力であるに違いない。欧米では日本学研究者の学会は毎年各地で行なわれているが、その際に使用される言語は英語中心というのが現状である。そのようななかで本学とのコラボレーションは、レベルの高い聴衆の前で日本語で研究成果を発表する最適の環境を提供しているのである。一方、本学の研究者でドイツ語を使用する者にとって、このシンポジウムは日本やドイツ語圏の文化現象を本格的にドイツ語で話せるというすばらしい機会を提供してくれる。特に日本の文化現象を比較学の可能性を含めてドイツ語で発信できることは、研究者の意欲をかきたてるものである。

ここでは著者の一人である井戸田の場合を例に挙げたい。井戸田の専門

領域の一つに比較演劇学があるが、この領域との関係で井戸田はウィーン大学とのシンポジウムでは一貫して浅草をテーマに取り上げてきた。ウィーンにおいてドイツ語で取り上げたテーマは次のもので、ごく簡単に内容を紹介しておこう (テーマは出版時におけるものを挙げる) ー

1.(第 2 回シンポ) Schaulust-Erlebnisse auf der Kabuki-Bühne. Fallschirm- und Flugakrobatik im Theaterraum.
2.(第 4 回シンポ) Kawabata Yasunaris „Rote Bande von Asakusa“. Im Tôkyôter Stadtviertel zwischen Schaulust, Eros und Verkleidung.

前者は、1890 年浅草六区に建設された凌雲閣 (浅草 12 階) の持つ文化史的・社会史的意味を探る上で興味深い凌雲閣双六の仕掛けを紹介しながら、そこに描かれている風船乗りスペンサーの当時のアクチュアリティに接近していく。資料の面からこのスペンサーが何者であるかを突き止めることは困難であるが、スペンサーの気球乗りは当時、二重橋における天覧に至るほどの人気と話題性を得ていたのである。凌雲閣開場とスペンサーの話題を結びつけて河竹黙阿弥は『風船乗評判高閣』という芝居台帳を著した。そしてスペンサーを 5 代目菊五郎が演じて見せたのである。この講演では、菊五郎の人形振りや空中飛び、さらに英語を話す菊五郎などを歌舞伎舞台の独自の技術を説明したり、あるいは当時の舞台写真も見せながら詳細に紹介した。このような時事性に富んだ芝居は際物と言われていたが、井戸田はウィーンの聴衆の理解のために “Dokumentations-Kabuki“という概念を考案した。講演の後インタビューを受けたが、双六についての関心が高いことは今後のテーマ選択に関して興味深いことと思われる。

後者は川端康成の浅草小説『浅草紅団』を中心に、1920 年代の終わりから 30 年代初めまでの東京の盛り場、浅草と銀座の盛衰を紹介しながら、銀座のモダンに対する浅草の陰を描写する川端の技法を分析した。川端は浅草で人気を博したカジノ・フォーリーを取り上げている。カジノ・フォーリーは演劇史のなかではモダンなレビューの常小屋ということになっているが、しかし作者の鋭い臭覚は「壁、椅子、床」に「乞食のにおい」を嗅ぎつけている。作者は読者に、「諸君、これは形容ではない」と呼びかけている－「レビュー舞踏団の旗揚げの頃も、水族館は乞食や浮浪人の客が

あったのだ。近代風に化粧した裸体の踊りを乞食や浮浪人が眺めている－この怪奇な風俗画も浅草だ」。主人公の弓子はこの風俗画の一つの添景と言える存在である。レビューの踊り子としてモダンを生き、同時に「浅草の醜いどん底」にも通底している弓子の存在そのものが浅草の具現となっている。この講演では、弓子に案内されて浅草空間を遊歩する「私」が報告する浅草の「怪奇な風俗画」を詳細に紹介し、それが作者である「私」を惹きつけてやまない浅草の魅力であった点、さらにそれが 30 年代における風俗取締りのなかで次第に失せていく状況を描いた続編『浅草祭』にも触れた。

『浅草紅団』は 1999 年にドイツ語に翻訳され、“Die Rote Bande von Asakusa”というタイトルで出版されている。オーストリア・ラジオ放送局のユーディト・ブラントナー女史がこの小説に強い関心を持っており、それが先に述べた井戸田にたいするインタビューに繋がったのである。

シンポジウムにおいてどの程度の内容のものがドイツ語で話されているのかを紹介するために、ここでは著者の一人の事例のみを挙げさせていただいた。参考資料として第 1 回シンポジウムから第 5 回シンポジウムまでの全プログラムを掲載するので、文学、演劇、芸術の広い分野について日本側参加者によってドイツ語で紹介されているのを見ていただけるであろう。ウィーン側の発表の水準も優れたものであり、共同シンポジウムが毎年このような高い水準で継続的に行なわれている例は多くないと思われる。ウィーン大学がこのシンポジウムのさらなる展開に強い期待を持っていることは、学際的国際研究が実質的に行なわれて点に帰するのではないだろうか。

さて、第 1 回から第 5 回までは、古い時代から現代に近づけてくる形でテーマを設定してきたが、今後は別の方法でテーマを考案していくことになるであろう。その際にいくつかの考え方があるであろうが、いずれにしても双方の図書館が保有している資料について今後情報交換をしていくことは大きな意味を持つであろう。

ウィーン大学には中央図書館以外に、それぞれの研究所や専攻が専門図書館を有している。日本学研究所の図書館には、例えば柳亭種彦の『浮世形六枚屏風』(資料 1) が所蔵されている。これは、文政 4(1821) 年永寿堂

40

Muth und sprach: Während ich an der Uferseite des Hanses Utakawa auf Gäste wartete, ward plötzlich etwas gleich einem Stein hereingeworfen, welches die Laterne meines geforderten Bootes zerschmetterte. Als ich es aufhob und betrachtete, war es ein Paket mit hundert Tael. Ich hielt dieses für ein Wunderding; und suchten ich hinter den Wandschirm ouve Worte gehört, versuchte ich es als ouer Geld, welchen ihr statt des Steines nach dem Hause geworfen. Das Dienstmädchen lieferte die Erklärung der Stelle, wo der Hund niederfällt und der Schatz zum Vorschein kommt, und das blumige Hinu, welchen einst traurig dartiber das „Rinst" [1]) wiederholte, wird jetzt auf einmal aufblühen. Fräulein Komatsu, welche über eine glückliche Vorbedeutung erfreut sein wird — Indem er hier empfindliche und inniglich, traten heerin Hinuke und Wufuna, welche des Sachess müde waren. Als sie den Herzgang der Sache erhörten, freuten sie sich über den unerwarteten Ausgang und ihr gemeinschaftliches Zusammentreffen. Von dem nahen Altan ertönte ein Verlobungsgesang:

Die Zeit ist an der Mauer
Die hohe Ephemrake:
Sie ondet nicht, sie hattet nicht,
Zählt tausend, tausend Jahre.
Sie nählt sie, und durch dieses
Sei immer sie erfreulich.

Somit reisten Sukitsi, Komatsu und Hinuke nebleunigst nach Kanakura, und die Freude der lange von einander getrennten Anthera und Kinder beim Wiedersehen war durch Worte nicht zu beschreiben. Auch die Freude des Gebieters hatte keine Grätzen. Er besorgte auf's beste die Vermählung des ursprünglich ungesonnenen Hiltenus Sinsuo Suka mit der verkehrgetrehrten Komatsu. Tufei und Wufuna überzeugen jenen Heirhandel, und alle, durch Liebe gegen ihre Aeltern ungezeichnet, erhielten Silber und Tischer, und thaten fertin nur erfreuliche Dinge. Erfreulich! Erfreulich!

[1]) „Rinst" das Wort, mit welchem die Erzählung des Bäderbotten (S. 13) endig.

資料 1

から刊行されたものの覆刻出版であり、1847(弘化 4) 年ウィーンで発刊されている。原版は手書きの本文と絵を版下にして木版に彫り、バレン刷りをしたいわゆる整版本であるが、覆刻版は原版の雰囲気を壊さずに、しかも金属活字を使って忠実に再現したのである。ウィーンで作られた連綿体活字を味わうことのできる稀書である。東洋学者アウグスト・フィツマイァーの序文には、ウィーン王立印刷所が収蔵していた原著を、可動活字印刷によって覆刻したと記述されている。さらにフィツマイァーによるドイツ語訳も付されており、ヨーロッパにおける日本文学受容の貴重な資料である。

資料 2

また資料 2 はカール・フローレンツによる日本芝居の翻訳本の表紙であり、当時の芝居小屋における客の様子が生き生きと描かれている。これらの資料や本学の翻訳資料を基に、シンポジウムにおいて文化翻訳の歴史と可能性の問題を扱うことができるで

あろう。

さらにウィーンの日本学研究所には『往生要集』のような文献も所蔵されているので、今後「生と死」に関する総合テーマで国際比較学的視点によるシンポジウムを組織したいとも考えている。本学図書館はこの領域の図像資料などを多く所蔵し、また優れた業績もあるので、関係する研究者に呼びかけて、実現したいと思う。

参考資料－第 1 回シンポジウムから第 5 回シンポジウムまでの全プログラム

第 1 回

総合テーマ：十九世紀における日常と遊びの世界－江戸・東京とウィーン－

第 1 日 (2001 年 1 月 25 日)

(1) 須永恆雄 (明大・法)「アーダルベルト・シュティフターにおける老いの諸相」

(2) スサンネ・フォルマネク (オーストリア学術アカデミー)「十九世紀江戸とウイーンにおける老いの実情」

(3) ブリギッテ・シュテーガー (ウィーン大)「江戸・東京とウイーンにおける＜夜＞と＜眠り＞」

(4) 圭室文雄 (明大・商)「とげぬき地蔵の信仰」

(5) サン-キョン・リ (ウィーン大)「十九世紀ヨーロッパにおけるジャポニズム」

(6) セップ・リンハルト (ウィーン大)「1845 年江戸の菊人形展と十九世紀ウイーンの民俗展覧会」

(7) 井戸田総一郎 (明大・文)「見世物空間の展開と都市－プラーターと浅草－」

(8) 神山彰 (明大・文)「見世物としての劇場・劇場の中の見世物」

(9) ローランド・ドメーニヒ (ウィーン大)「箱の中の三次元世界。十九世紀の＜テレビ＞ －覗きからくり、ステレオスコープ、カイザーパノラマの歴史と意味－」

第 2 日 (1 月 26 日)

(1) イングリト・ゲトロイヤ＝カーゲル (ウィーン大)「十九世紀における女性の行動範囲－文筆家松尾多勢子とベティ・パオリを例として－」

(2) 菊池良生 (明大・理工)「フランツ・ヨーゼフ一世の王としての身体」

(3) ウォルフラム・マンツェンライター (ウィーン大)「都市型身体の養成－東京とウイーンの近代におけるスポーツの役割－」

(4) 齋藤孝 (明大・文)「民間における伝統的な身体教育」

第 2 回

総合テーマ：Alltag und Freizeit in Tokyo und Wien um die Wende vom 19. zum 20. Jahrhundert

25. März 2002, 10-13 Uhr: Intellektuelle Diskurse

(1) Yoshio KOSHINA, Meiji-Universität: Die Romantik in der Meiji-Zeit und die Wiener Moderne: Myôjô-Akiko-Ver Sacrum

(2) Wendelin SCHMIDT-DENGLER, Universität Wien: Altes und Neues. Literatur und Wissenschaft in Wien um die Jahrhundertwende

(3) Eriko HIROSAWA, Meiji-Universität: Freie Liebe. Diskurse der Liebe bei intellektuellen Frauen in Wien und Tokyo um die Jahrhundertwende

25. März 2002, 15-18 Uhr: Soziale Diskurse und soziale Situation

(4) Sepp LINHART, Universität Wien: Matsubara Iwagorô und Max Winter - Sozialreportagen um die Jahrhundertwende in Tokyo und in Wien

(5) Brigitte STEGER, Universität Wien: Geburtshilfe in Tokyo und Wien um 1900

(6) Susanne FORMANEK, Österreichische Akademie der Wissenschaften: Der Diskurs um Ausgedinge und Pensionssystem um die Jahrhundertwende in Tokyo und Wien

26. März 2002, 10-13 Uhr: Zur Ästhetik des Alltags I: Theater

(1) Edda FUHRICH, Universität Wien: Zur Theatersituation in Wien um 1900. Ein Aufbruch?

(2) Michio HARA, Meiji-Universität: Theaterlandschaft in Tokyo um die Jahrhundertwende

(3) Monika MEISTER, Universität Wien: Theater der Wiener Moderne

26. März 2002, 15-18 Uhr: Zur Ästhetik des Alltags II: Schaulust und Film

(4) Sôichirô ITODA, Meiji-Universität: Schaulust-Erlebnisse auf der Kabuki-Bühne: Fallschirm- und Flugakrobatik im Theaterraum

(5) Roland DOMENIG, Universität Wien: „Die Versammlung brach in stürmischen Beifall aus“. Zu den Anfängen des Kinos in Tokyo und Wien

(6) Susanne SCHERMANN, Meiji-Universität: Die Rezeption des frühen Stummfilms in Wien und Tokyo

第 3 回

総合テーマ：1920 年代の日常とあそびの世界－東京とウイーン－

第 1 日 (2003 年 7 月 10 日)

(1) 恒川隆男 (明大・文)「大正期の大衆小説－中里介山－」

(2) 福田真美子 (明大・文)「モダニズム文化としてのカフェー」

(3) セップ・リンハルト (ウイーン大)「1920 年代のレコードと歌謡－ウイーンと東京－」

(4) 小川武敏 (明大・文)「石川啄木と大逆事件」

(5) ヴェンデリン・シュミット-デングラー (ウイーン大)「変革の場としてのウイーン－ 1918 年革命とその文学及び哲学における影響」

(6) 井戸田総一郎 (明大・文)「文学に表現される見世物空間浅草－谷崎潤一郎の『襤褸の光』」

(7) スサンネ・フォルマネック (ウイーン大)「20 年代の児童文学－ウィーンと東京－」

第 2 日 (7 月 11 日)

(1) 宗宮朋子 (明大・文)「日本スキーの親－テオドール・フォン・レルヒとハンネス・シュナイダー」

(2) クラウディア・シュミットホーファ (ウイーン大)「1920 年代における日本への旅－アルマ・カーリンとアリス・シャーレック」

(3) 清野幾久子 (明大・法)「1920 年代の日本・オーストリアにおけるくらしと憲法」

(4) ブリギッテ・マルシャル (ウイーン大)「レーヴィ・モレーノの即興劇」

(5) 武田清 (明大・文)「村山知義－築地小劇場のダダイスト」

(6) ローランド・ドメーニヒ (ウイーン大)「ハラキリ・ゲイシャ・サムライ－ 1920 年代ドイツ映画に見る日本像」

第 4 回

総合テーマ：Alltag und Freizeit in Tokyo und Wien, 1920-1945

Fr., 7. Jänner 2005, 9:30 - 12:00 Uhr: Hörfunk

Eröffnung

(1) WATANABE Narumi, Meiji-Universität: Japanische Hörspiele in den 1930er Jahren

(2) Roland DOMENIG, Universität Wien: Fruchtbare Erde - Das Radiodrama *Tsuchi* von Mizoguchi Kenji und der Film *Tsuchi* von Uchida Tomu

13:30 - 15:30 Uhr: Kino

(3) TSUNEKAWA Takeo, Meiji-Universität: Sie gaben zum Besten - Über den Kinoerfolg *Aizen Katsura* aus dem Jahr 1938

(4) Susanne SCHERMANN, Meiji-Universität: Film in Zeiten des Krieges

16:00 - 18:00 Uhr: Literatur und Kabarett

(5) ITODA Soichiro, Meiji-Universität: Das Asakusa-Viertel in der Schwebe zwischen Verruchtheit und Sauberkeit-Kawabata Yasunaris Asakusa-Roman

(6) Sepp LINHART, Universität Wien: Die Tokioten kommen. Kabarett in Wien während der NS-Zeit

Sa., 8. Jänner 2005, 9:30 - 12:30 Uhr: Konsum, Stadtplanung und Sport

(1) Franz EDER, Universität Wien: Konsumieren in Wien, 1920-1945

(2) Wolfram MANZENREITER, Universität Wien: Sport in totalitären Systemen

(3) Peter EIGNER, Universität Wien: Im Wechselbad der Gefühle. Wien in den 1930er und 1940er Jahren

14:30 - 18:00 Uhr: Theater und Kunst

(4) AIHARA Ken, Meiji-Universität: Die 1930er Jahre im Spiegel der japanischen Holzschnittkunst

(5) Hilde HAIDER-PREGLER, Universität Wien:Wiener Theater im Spannungsfeld der Politik

(6) HARA Michio, Meiji-Universität: Die Glanzzeit des Kabuki im Tokyo der 1930er Jahre

第 5 回

総合テーマ：東京とウィーン－占領期から 60 年代までの日常と余暇－

第 1 日 (2006 年 3 月 2 日)

午前　10:00-12:30

・文学・スポーツ

(1) ヴォルフラム・マンツェンライター (ウィーン大)：戦後東京・ウィーンにおける民主化のスポーツとスポーツの民主化

(2) 井戸田総一郎 (明大・文)：娯楽を渇望する大衆と裸体文化－戦後浅草の芸能空間

(3) ウェンデリン・シュミット＝デングラー (ウィーン大)：戦争と戦後を語る:イルゼ・アイヒンガー、ハイミト・フォン・ドーデラー、インゲボルク・バッハマン

午後 14:30-17:40

・歴史・社会

(4) 山田朗 (明大・文)：「GHQ の対天皇政策―利用と抑制―」

(5) フランツ・エーダー (ウィーン大)：1945 年から 55 年までのウィーンにおける日常と消費

(6) 蔵満茂明 (明大・文)：「GHQ の対日占領政策と情報統制

(7) 小山亮 (明大・文)：「占領期天皇制のイメージ戦略―大元帥から「民主的皇室」へ―」

第 2 日 (2006 年 3 月 3 日)

午前 10:00-12:30

・音楽・漫画

(1) 吉田正彦 (明大・文)：「サザエさん」に見る戦後日本

(2) 相原剣 (明大・文)：三木鶏郎と戦後ポピュラーミュージック

(3) セップ・リンハルト (ウィーン大)：戦後歌謡におけるなぐさめ－日本とオーストリア

午後 14:30-16:40

・映画・演劇

(4) 神山彰 (明大・文)：占領期の日本演劇

(5) 瀬川裕司 (明大・理)：占領期のオーストリア映画

(6) ローランド・ドメーニグ：「第三の男」の痕跡を追って